

(社)東洋音楽学会関西支部

支部だより

第15号(1993-1-25)

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のご案内

(社)東洋音楽学会関西支部 第162回定例研究会

とき 1993年2月13日(土)14:00~16:30

ところ 国立民族学博物館 2F第3セミナー室

大阪府吹田市千里万博公園10-1 ☎06-876-2151

交通 北大阪急行「千里中央駅」または阪急「南茨木駅」にてモノレール乗換
「万博記念公園」下車徒歩15分(自然文化園は150円)

JR茨木駅より阪急バスまたは近鉄バス「エキスポランド行き」にて「日本庭園」下車徒歩15分(バスは1時間に2本のみ)

*建物北側の通用口から守衛さんに東洋音楽学会会員であることを告げてお入りください。正面からお入りになりますと一般来館者並に入館料が必要となりますのでご注意ください。

【連続講座】<音の今昔>

『基調講演 連続講座<音の今昔>へのご案内』 櫻井哲男(国立民族学博物館)

『歌が伝える村落の歴史』 中原ゆかり(総合研究大学院大学)

☎定例研究会終了後、懇親会を予定しております。是非ご参加ください。
(申込、会場等は4頁に記載)

(社)東洋音楽学会関西支部 第163回定例研究会

とき 1993年4月17日(土)14:00~16:30

ところ 大阪芸術大学

南河内郡河南町東山 ☎0721-93-3781

交通 近鉄南大阪線河内長野行準急にて「喜志」下車、大阪芸術大学教職員送迎バス
(12:30, 13:00, 13:45)をご利用ください。近鉄阿部野橋から喜志までバスの待時間も含めて約50分みててください。

【連続講座】<音の今昔>

『義太夫節奏演の諸相—昭和初期の音と昭和末期の音—』

山田智恵子(大阪音楽大学)

【研究発表】

『日本古代における中国音楽の受容—女楽の場合—』 趙維平(大阪大学大学院)

平

箏の旋律動態とその表現技法について—唐楽の場合—

辻尾 真弓

今回の研究は雅楽の中でもとくに箏をとりあげ、その旋律がどのようなものであるのか、旋律の動きとそれを作り出す技法との関連性を中心に、また「旋律型」の分類といった問題も踏まえながら、演奏家としての立場から分析を試みた。方法としては従来このような旋律分析を行う際に用いられてきた五線譜への採譜をやめ、旋律の動きを視覚的にとらえることが可能なfigure表記を用いた。手順は、1)縦軸に音高、横軸に時間の推移をとった図表上に旋律動態を線で表す。2)書き表された旋律動態を、箏譜の仮名譜における○印(仮名文字がいくつかまとまって単位をなし、一つのフレーズをなす箇所)でもって区切る。3)区切られたそれぞれの旋律動態において、旋律動態が明らかに一つの技法出もって形成されていると判断される箇所ですらさらに区切り、その各々を抜き出す。4)抜き出された各々の旋律動態を、音高、音価、調という概念を無視し、全く視覚的にとらえて同型であると認識できる動態同志をまとめ、分類する。以上の結果、次の2点が明らかになった。①箏の旋律は5つの動態パターンによって成り立っている。②5つのパターンは調を問わず唐楽曲すべてにあらわれており、従って箏の旋律動態は調性とは無関係に存在している。

さらにこの5つの動態パターンを「本譜」の面から考えてみると、以下のようなことがいえる。1)つまり5つの動態パターンに相当する譜字の配列が音高、音程といった旋律動態の大略の形を決定づける。2)しかし箏の旋律形成に最も重要な意味を持つものは「五線譜では表しえない微妙な音の動き」、つまり譜字と譜字とをどうつないでいくかという問題であり、この「つなぎかた」こそが箏の技法なのである。

第16回2期定期研究会

連続講座『音の今昔』へのご案内(基調講演要旨にかえて)

櫻井 哲男

このたび新しく『音の今昔』というテーマで関西支部例会の連続講座を続けることになりました。このテーマの発案者として、考えているとことを二、三申し述べます。

まずここで言う「音」は、できるだけ広く解釈していただきたいと思います。狭い意味での音だけではなく、声や楽器、歌、楽曲、様式などと読み替えてくださって結構です。民族やジャンルを問わず、音楽にかかわる「～の今昔」に焦点を当てたシリーズとなることを意図したものです。

つぎに「今昔」の時代ですが、これもとくに限定せずにおきたいと思います。現代と前近代というような時代設定もできるでしょうし、古代と近世の比較もありうるでしょう。あるいはもっと微視的な区分、たとえば今世紀の後半とか1970年代と1980年代のちがいをといった時代のたてかたも、対象によっては出てくる可能性があります。

ポイントは、広い意味の音による表現の研究に時間軸をとりこむという点です。別に歴史的視点などと大上段にかまえるつもりはさらさらありません。しかしその反面、たんに何がどう変わったかという話だけでも物足りない気がします。たとえば変遷や(場合によっては異文化接触による変容も含んでの)変化が、どのような要因によってもたらされたものなのかというあたりを、共通の問題意識としてみてはどうかと考えています。

お一人で「今昔」すべてをお話なさることもあるでしょうが、ときには同じジャンルや関連する分野の「今」と「昔」をお二人で分担なさるという方法もあるかと思えます。またかならずしもスピーカーの話だけで完結しなくても、むしろフロアをまきこんでの討論が盛り上がりすれば、より楽しい例会の場になるのではないのでしょうか。

2年間(あるいは、もしかするともっと長期になるかもしれませんが)めでたく連続した暁には、できれば何らかのかたちでまとめて出版したいという夢も描いています。1度話してみようと思われる方は、早い機会にお気軽に例会係までご一報ください。

一村落で現在歌われている歌の音楽的区分が村落の秩序を維持し、かつ村落の歴史的過程を暗示しているという事例について紹介する。

対象とするのは、鹿児島県奄美大島笠利町佐仁集落の八月踊りである。八月踊りは旧暦八月、農耕儀礼、祖先祭祀と結びついて奄美大島一帯で行われている行事の中で、各集落を伝承集団として行われている。八月踊りのパフォーマンスは、太鼓を伴奏楽器として男女集団で歌を掛け合いながら一円を描いて踊る。

佐仁の八月踊りは集落を二分する前・後の土地区分に別れ、集落内の家々を一軒一軒残らず踊り巡って行われる。前・後ともに常に互いの踊りを意識しながら、踊る人数、歌や踊りの技術を競いあい、互いに自分たちのパフォーマンスの方が優れたものになることを理想としている。そして前・後のパフォーマンスの違い、歌や踊りに関する互いの考え方の違い、前の人、後の人の気質の違いが様々に語られる。

前・後の八月踊りの決定的な違いは、歌の掛け合い方に関する音楽的相違点として象徴され、その音楽的違いは「前の歌よりも後の歌の方が伝統的である」という区分として語られる。現地で前・後の土地区分に関する伝承はない。だが集落の空間デザイン的人类学的研究からは、後の方が前よりも集落の古い部分であることが実証される。佐仁八月踊りの歌の音楽的側面に表象される後の歌の伝統性とは、村落の歴史的過程を暗示するものだったのである。

以上の事柄について、採譜資料等により詳しく説明する。さらにパフォーマンスへの参加に関して前・後の境界があいまいであることに起因する所屬意識の強さが歌の二項対立を維持してきた点、集落内における前・後の区分の機能的役割について検討していく。

第153回定期研究會

昭和63年1月から、国立文楽劇場調査養成課調査資料係では毎月一回「SPレコードを聴く会」（平成2年からは「義太夫SPレコード鑑賞会」）という活動を行ってきた。これは現在そのままの状態では活用できないSPレコードの音をテープに落として保存し、その成果を一般にも公開しようという試みである。音盤は文楽劇場のものをはじめとして、いろいろな研究機関や個人が所有するもののうち、状態のよいものが選択されているという。そして、そのうちの何曲かはSPレコード復刻CDとしても発売された。

明治末期から戦後にかけて発売された義太夫節のSPレコードは、名人といわれた演奏者はもちろんのこと、LPレコードやテープなどであまり録音されていない個性的な演奏者の音を直接耳で聴くことが出来る唯一の手段であり、義太夫節の研究にとって第一級の資料である。義太夫節は「演奏」そのものを伝承してきた芸能であるので、SPレコードに記録された明治・大正・昭和の音を直接聴くことにより、多くの芸談などの文献の記述内容を検証し、演奏の諸相を知ることができるのである。文楽劇場のこうした事業は、われわれにはたいへん有り難い。

今回の報告では、『ひらかな盛衰記』三段目切く松右衛門内の段を例にして、四世織太夫・七世団六（後の八世綱大夫・十世弥七）による昭和13年のSPレコードの音と、昭和60年の七世往大夫兼名披露公演（東京国立劇場）の七世往大夫・錦糸の音とを比較する。昭和初期と末期というおよそ50年を隔てた2つの演奏は、同じ曲でもかなり異なっている。どのような部分がどう異なるのか、そしてそれはどんな意味をもつのかということについて、主に「風」といわれる音楽様式の観点から述べる予定である。

懇親会のお知らせ

ところ 山里波(しゃぶしゃぶ-和風レストラン)
☎06-832-0878, 06-831-3761
北大阪急行・モノレール「千里中央」駅前ビル セルシー6F

とき 2月13日(土)
時間 17:30~19:00
会費 5000円程度

★参加ご希望の方は2月10日(水)までに下記までご連絡下さい。

Tel: 06-878-8320 国立民族学博物館内櫻井研究室
Fax: 06-878-7503 国立民族学博物館 櫻井宛と明記
Tel: 06-875-2529 櫻井自宅宛
Fax: 06-875-2562 櫻井自宅宛

今後の定例研究会開催予定

第164回 1993年6月(情報処理学会音楽情報科学研究会との合同)
第165回 1993年9月
第166回 1993年11月⇒12月に変更可能
第167回 1994年2月
第168回 1994年4月
第169回 1994年6月

申込方法

連続講座、発表の種別(研究発表・調査報告・資料紹介・研究演奏など)、発表題目、使用希望機器、希望日、所属、氏名、連絡先、を明記の上、下記宛にご送付ください。申込多数の場合など、必ずしもご希望に添えないこともありますのであらかじめご了承ください。

定例研究会のお問い合わせ

1993年3月末日までのお問い合わせ先

☎565 吹田市千里万博公園10-1 国立民族学博物館 櫻井哲男
Tel. 06-878-8320
Fax. 06-878-7503(櫻井宛と明記)

1993年4月以降のお問い合わせ先

☎673-14 兵庫県加東郡社町下久米942-1 兵庫教育大学 水野信男
Tel. 0795-44-1101
Fax. 0795-44-0669(水野宛と明記)

住所変更等連絡先

☎560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室気付
*葉書にてご連絡をお願いいたします。

発行:(社)東洋音楽学会関西支部

☎560 豊中市待兼山町1-1 大阪大学文学部美学科 山口研究室気付